

## スクリプト比較研究の文化心理学的位置づけ

清泉女学院大学 東 洋

### Comparison of Scripts As an Approach to Cultural Psychology.

Seisen-Jogakuin College AZUMA, Hiroshi

#### Abstract

The explanatory power of the classical concept of the culture as a group property that transcends individuals seems to be diminishing as a result of the progress of globalization in the latter half of the 20<sup>th</sup> Century. People grow and live multi culturally, and cultures are interacting and changing ceaselessly. In this article, the need to define an alternative concept of the culture, the personal culture, is discussed. It is the culture that surrounds an individual and interacts with her as her developmental niche.

As an example of the efforts to build the linkage between personal and group culture, a series of the works on the cultural comparison of event script by the author and his colleagues are introduced.

#### スクリプトと理解

単発的助成をするよりも若干の主題に沿った研究グループを継続的に育てようとする発達科学研究教育センターの初志に賛同し、過去10年余にわたって、当発達研究誌上に、筆者及び筆者の研究グループのメンバーによる、日米比較を軸にした文化心理学的発達研究、そして特にこの数年は出来事スクリプトの文化比較に関する研究を発表してきた。だが方法の創案や分析が主になるので、なぜこの問題にかかわるかについて、系統的に述べてはいない。1999年の本誌に若干ふれてみたが、着想段階の6年前のことなので実例を欠き抽象的な言及にとどまった(東, 1999)。本稿では筆者の作業仮説と接近方法の発達を軸に一連の研究を位置づけるとともに、若干の理論的考察を試みる。

スクリプトは、出来事がどのように進行するはずかという予備的な知識である。よく例にひかれるのはレストランスクリプトで、レストランに入る時には人は一連の予期をもっている。コートを掛ける、席に案内される、メニューを渡される、オーダーする、等々である。旅に出る時も、演劇を見る時も、人と交渉する時も、学术论文を読む時も、どういう風に話が進行するかについての手持ちのスクリプト(しばしば複数)を活性化させ、それによって予想や計画を行なう。ただし、出来事がすべて

全く既存のスキプトの通りに生起し進行するならば、その出来事は無情報で全く習慣的に対応でき、認知的負荷をとまなわない。

だが実際の出来事には殆ど必ず、スキプトに含まれない多くの状況的な要因が同時にかかる。出来事の認識、理解、記述は、そこに起動されたスキプトによる、それら諸要因の関係づけと摺り合わせである。Bruner (1990, p.49) が、「物語 (story または narrative) の機能は、基準的な文化パターンからの逸脱を鎮静する、又はすくなくとも理解可能にする」ことだと述べているのは、物語の中で上記の擦り合わせがなされるといふことに他ならないと思う。しかし、「基準的な文化パターン」とそれから逸脱した事象があれば自動的に一つのまとまった、理解可能な物語が発生する訳ではない。物語を形づくる筋道としてのスキプトが必要である。そして与えられた状況に対して起動されうるスキプトは単一ではない。その状況に適用可能なスキプト群がある。もし一つの出来事の認識や理解に際して起動されるスキプトが異なれば、どこに問題性を認めるかも、どういう擦り合わせを必要とするかも異なり、従ってそこに生まれる物語も理解も異なってくるだろう。このスキプト群は、それぞれの個人によって、文化的経験や文化的コミュニケーションにより、つまり文化的に学習される。

筆者がスキプトの文化比較に関心を持ったのは、異文化間の理解や誤解において、上のようなわけで、問題の事象に関してのスキプトのレパトリーの共通性や食い違いが関係していると考えたからである。ある人が、人とぶつかって「失礼」とあやまれば相手も「失礼」と返すものだというスキプトにのっていたとする。ところが相手は小さくうなずいて謝罪を受け入れた合図をするだけだったなら、ある違和感を覚えるだろう。知らん顔をされればもっと不快であろう。この違和感や不快を緩和するには、何かの説明ないし物語が必要になる。相手には「失礼」といわれてどう対応すべきかのスキプトの準備がなかったのかもしれない。あるいは別のスキプトがより取り出しやすい位置におかれていたのかもしれない。スキプトはその人を取り巻く文化環境から獲得されることが多いので、異なった文化環境で育った人々の間にはこういう食い違いがおこりやすい。相手のスキプトが違うのだとわかれば、それはこの小さな文化摩擦により生じる心理的な歪みの緩和につながる。

スキプトというのは広い概念なので、必要に応じて、特に人間関係の出来事の経過のスキプトに「出来事スキプト」という語を用いる。

## 道徳的判断とスキプト

筆者が発達と文化のかかわりの心理学的研究をはじめたのは1970年代のことで、文化間の相互理解に資したいという問題意識に駆られてのことではあったが、まだはっきりスキプトの問題を意識してはいなかった。最初にスキプトということに注目したのは、1989年にミシガン大学に赴任中、同じ事件でも日本人の多くが憤慨する点とアメリカ人の多くが憤慨する点とがしばしばずれていることに注目し、道徳判断の手がかりの日米比較をはじめた時である。ある行為がどれほど悪いかを評価するのに、問題とする逸脱行為からどういう情報を拾い出して判断するか、つまりどこに問題性を認めるかを見た(東・唐沢, 1989)。同じ「犯行」の物語でも、計画性、被害額、責任能力などに注目し

て綴ると、どれほど同情の余地があるか、本人がどれ程後悔しているか、などに注目して綴るとでは異なった物語になる。

この点のある程度定量的に捉える方法として「逐次明確化法」を創案した。はじめになんらかの逸脱行為のごく簡単な記述のみを示し、その行為について道徳的受容可能性に関する判断を求める。その後、被験者の求めに応じてその行為の動機、背景、結果などの情報を逐次与えて、その度に新しい判断を求めるのである。

日米の大学生を対象に調査した結果は、詳しくは他著にゆずるが、情報選択の順位、それぞれの情報が「悪さ」の評価に及ぼす影響力などから、かなりはつきりと日本に多い「情状や気持ち」に関心を寄せるfamily metaphorと、米国に多い「事実や結果」に関心を寄せるcourtroom metaphorとにタイプがわかれた(東・唐沢1991, 東, 1994, 東, 2002)。そしてその分析の過程で、被験者は与えられた情報のみでなく、情報の空隙を推測によって埋めながら判断しているらしいということが認められた(東・唐沢, 1991)。つまり、「学生Aが先生に故意にけがを負わせた」という短文を示してその行為の受容可能性を問うと、その事件の経緯について、まだ与えられていない関連情報をいろいろ推測するのである。推測の内容は漠然と「何か理由があるはずだ」といったところから、「よほどひどい扱いをされたのだろう」「性格的にきれやすかった」「けがは軽かった」「当然罰を受けただろう」などいろいろだが、未だ情報が充分でないうちから被験者はその空隙を埋める情報を想像して、時には空隙に代入してさえいるのである。人によっては幾通りもの想像をしている。そしてその想像の傾向に、統計的に、日本人の場合同情できる事情を想像する傾向があり、米国人は同情を排除した想像をする者が多いことが、当初の判断において日本人より米国人の方がきびしく、情報が順次与えられると両者が接近する理由であろうと推測した。

このような「想像による情報の空隙埋め」の下敷きになっているのは、人間関係にかかわる出来事が一般的にどのように発生し、経過し、結末づくものであるかという知識、つまり人間関係の出来事のスクリプトだと考えられる。そのようなスクリプトが知識の中に幾通りも、与えられた条件のもとでの取り出しやすさを異にしながら、獲得されていると考えられる。われわれの逐次明確化法への反応を比喩的に云えば、最初の課題文から「教師と学生」「傷害」のキーワードによってスクリプトの蓄積のなかからいくつかは活性化され、つづいて獲得される情報、つまりキーワードの追加にしたがって範囲が狭められたり、選び直されたり、精緻化されたりし、それにしたがってそのスクリプトの上に作られる物語が「悪さ」の評価を駆動するというモデルである。

なぜ日本と米国の間でこのような相違を生じたかについては、実験心理学的な基準での確実な因果関係を求めるのは困難である。筆者は、律法的な道徳観を持つユダヤ・キリスト教の伝統のある米国に対し、摂取不捨の信仰に傾く日本的仏教が力を持っていた日本、及び人間関係が運命的なしがみになる「むら社会」が近い時代まで続いた日本の過去に対し、分離(独立)拡大による開拓を推進して来た米国の過去が、こういう相違に関係すると考えているが、さらに多くの条件がかかわるであろう。Gilligan(1982)はコールバーグの「正義の道徳性」に対し女性の立場からの「配慮と責任の道徳性」を対置したが、上の日米差はそれを連想させる節もある。いずれにせよ個人における出来事スクリプトのレパートリーは、人種や性別の生物学的な規定を直接受けるのではなく、個人の経験や、仲間の

話や、教育や、文字、映像媒体を通じての文化学習などを通じて形成される。人ごとに異なるけれども、経験や文化刺激に共通性が高い人同士の間では重なりが大きいであろう。従って、たとえば日本と米国というように、各種の文化刺激の分布密度の異なる文化圏に生育する人の間ではレパトリーが異なる蓋然性が高い。

## 物語完成法による研究

だがこの種のスクリプトのレパトリーに接近するためには、逐次明確化法はいかにも間接的である。そこで次の段階では、より積極的に、どういう物語を創成するかを直接に見る事を試みた。逸脱行為の短い記述を課題として示し、その前と後に何が起きたかを想像し、まとまった短い物語に作り上げることを求めた。物語完成法と呼んでみよう。たとえば「明子さんは大切な学年末試験の成績について、お母さんに嘘の成績をいいました」「尚美さんの友だちが彼女の陰口を云っていました」など6課題である。これをやはり日米の大学生を被験者に行なってみた(真島ほか, 1994, 1995)。創出された物語をタイプ分けしてみると、行為者と被行為者の事前の関係にすでに問題があったとするものが米国の方が日本より多く、事後に関係が修復される話は日本の方が米国より多く、問題の行為が行なわれた理由となった状況がやむを得ない偶然である話は日本に多いのに対し、行為者の責任に言及する話は米国に多かった。

課題の「逸脱行為の記述」は、すでにもっとも日常的な期待、すなわちdefaultのスクリプトからずれている。それを理解可能にするためには、その逸脱行為が、別の物語に埋め込まれなければならない。しかもその物語は、defaultとは異なるけれども、話者および想定される聞き手のレパトリーのなかにあるスクリプトに沿っているものでなくてはならない。そういう場面でつくり出される物語の型の分布が二つの文化圏で異なるならば、それぞれの文化が蓄えているスクリプトの分布が異なるのだと考えられる。そこで上述の2研究からすれば、加害・被害関係のような人間関係の葛藤にかかわって、米国では対立、抗争、権利、などをめぐるスクリプトが、日本では偶発、自責、和解などをふくむスクリプトが起動される確率が高いと推測される。

なぜそのような差異があらわれるのかについて、筆者ははっきりした説明をもたないが、すでに触れたように、過去300年程の間の日本と米国との社会、経済、資源的な生態条件が異なり、従ってそれに対する適応としての出来事や行動のパターンの分布が異なるのではないかと推測している。けれどももっと短期的な流行かもしれないし、われわれが対象としたのが都会地の大学生に限られていたためかもしれない。また逆に長い文化伝統、さらには生物学的な条件に根ざす部分もあるかもしれない。またMarkusとKitayama (1991)が提案するような大きく包括的な心理規制としてのself construalも関係するかもしれない。

これらを詰めて行くためには別個のかなり大規模なフィールド調査を必要とする。差し当たっては、このようなスクリプトのレパトリーの違いが、人間的葛藤を含む出来事の当否の判断や評価についての文化間の理解の齟齬を招く可能性が高いことを指摘するのとどめよう。

## 自分自身の過去や将来に関する記述

さて、上述の2研究では、道徳的逸脱行動をめぐっての判断や推測に、どのような物語に当てはめてその出来事を考えるか、つまりどのようなスクリプトを起動して対処するかにおいて、日米の被験者間に差異が認められることが示された。このような差異が、特に逸脱的行動を含まない日常事象の記述においても認められるか否かを見ようとしたのが次の研究である。過去における自分の努力、及び将来における自分の普段の一日についての自由記述を、やはり日米の大学生を対象に求めた。個別面接の中での課題文で、最初の課題は「ここ数ヶ月の間に、はっきりした目的をもって努力したこと」(真島・Shapiro・東, 1998)次は「今から20年後のあなた」の「10月のある日(平日)の生活」、次ぎは同じく今から7年後について、行為、考え、感情などを出来るだけ詳しく書くことを求めた(準備中)。これらの作文のそれぞれについて、含まれる内容を日米共通のコード法により詳しく分析した。

詳しい結果は省くが、際立って目立った日米の差をあげよう。はじめの「目標を持って努力したこと」の記述において、米国では努力の当面の目標や達成結果が記述されているものが多く(日28.6%, 米70.0%), 日本では遂行のプロセスにおける本人の気持や態度の記述が多かった(気持: 日81.3%, 米42.3%)。この結果についてはコーディングの方法をその後さらに改訂したため数字は若干変更されるが、大勢に変化はないため、中間報告の数字を用いた。

これに共通する傾向は、20年後及び7年後の一日記述にもあらわれる。たとえば7年後について「こうなる」「こうなっている」と断定的な書き方で達成目標ないし達成結果を書くものが日本では少なく米国では多い(日5.4%, 米68.3%)。また、達成についてはあいまいで生活や生き方での気持や態度を述べるものは日本で91.1%, 米国で15.0%である。20年後の記述についても傾向は同じである。

このような差異には、言語や表出習慣の違いも関与しているかもしれないが、その差異の大きさと傾向の安定性から考えて、作文に際してたてる物語の骨組み、すなわちスクリプトの選び方に違いがあるのではないかと考えられる。さらには、日本の文化の中では目標の達成を中心テーマにする達成スクリプトよりも、行為の過程での心事や出来事に注目するプロセススクリプトの方が優勢で起動されやすい状態にあると推定される。かなり飛躍した推量で、心理学的な角度のみから詰めるのはむずかしいが、河合隼雄(1982)が指摘する日本の物語の傾向とも符合する。

もうひとつあえて飛躍した推量をするならば、プロセスへの集中傾向は、達成目標の選択や、達成の可能性へのコントロールが限定されていると云う状況認知にもとづくのではないだろうか。森岡(1991)は大平洋戦争の特攻隊員が、成功の可能性がきわめて限られた状況のもとでも役割に忠実に、猛訓練に取り組んだのを「自発的役割人間過程型」と特徴付けている。しかしそのように劇的な状況でなくても、近い時代の日本の社会環境は、人生的な目標の選択に、米国にくらべると限られた自由度しか許容しなかったし、その達成可能性も本人の制御の範囲をこえた条件に依存することが多かった。そういう状況のもとで努力や自負や反省の対象となり得るのは、どのような目標を達成したかよりも、状況が設定した目標に向かってどのように最善を尽くしたか、または尽くし得なかったかである。宮本(1981)は、欧米型の達成動機概念に日本に適合しにくい点があることを指摘したが、このような「達成」の意味付けにかかわる社会状況にもその原因があるかもしれない。

目標構造についてのこのような文化的差異は、多分に状況的なものであろうが、特定の目標構造が同じ状況にある仲間を持続的に、あるいは繰り返し共有されると、個人や個々の状況を超えた文化的習慣となり、さまざまな状況のもとで如何に行動すべきかについての判断、つまり実際のな道徳判断の基準的な条件になるであろう。

### 三文化二世代間比較研究に向けて

以上の一連の研究はいずれも日本と米国の大学生を対象として行なわれた。これは筆者の関心が日米の差異の実感に触発されたこともあり、言語の問題や協力者の問題もあり、やむを得ない選択であった。

しかし二文化間比較の宿命として、1)相違は注目されるが共通点はおさえられない、2)二つの文化を両極とした二分法的認識をもたらしやすい、ということがある(東, 2003)。例えば2人の人の顔を対象とした場合、第3者を全く考慮しないならば、共通性はいわば前提であり「地」であって、相違点のみが記述に値することになる。またさまざまな次元で比較しても、それらがそれぞれ検出するA、B二者間の差異がA的対B的という主因子(判別関数)に集約されてしまい、二分法的に考察されることになる。

この制約を脱するためには、同一として扱った文化圏(たとえば日本という文化単位)内での下位文化の差による変動の諸次元をとりあげるか、三以上の文化グループ間の比較を試みるのが実際的である。前者においては、問題とする事象の規定因を、二文化圏を判別する合成次元に吸収されない形で検討することができるし、後者による場合は、文化グループの組み合わせ方で、一つのグループの特性、特定の下位グループの対にのみ共通する特性、グループをこえて共通する特性などにわけることができる。

われわれはまず前者のアプローチとして、1999年から、日本国内でかなり伝統的文化の色の濃い山形県庄内地方、沖縄本島、それに代表的混合都会地としての東京郊外を主な対象に、1998年までのわれわれの日米比較で日米間の差異が顕著だった事項を中心に、調査を試みた。けれども日本の中での変動は日米間の差に較べ予期したよりもかなり小さく、むしろ二分法的認識を強化しかねないものだった(東, 2002)。

後者のアプローチとしては、北京師範大学の張厚燦教授の協力を得、日米比較と平行的な調査を日中間で行ない、三文化間比較の分析を行なうことにした。文化内変動も見るとともに、協力者は北京師範大学、東京大学などのエリート大学生と、より一般的な大学生にわけ、また社会人(40 - 50代)のグループも編成した。デザイン上、米中比較は直接の比較でなく日本を仲介にした形になる。日中比較の課題を中国の文化状況に適したものにするためには、日米比較に用いた課題に若干の改変が必要だったためである。課題としては上述「将来の一日」自由作文、「努力したこと」自由作文、それに加えて日米比較はまだ行っていないが、「人物記述の重要事項チェック」を課した。これはある人物について物語を作るという設定で、その人物に関する32の情報項目から特に重要と思われる5項目を選んでもらう課題で、人の記述にかかわるスクリプトの素材構成を直接比較するために考案したもの

である。この課題への反応の米国に関する調査は未着手であるが、実施はきわめて容易な課題なので協力者を得次第近日行ないたいと考えている。

これらの研究はまだ分析を完了していないが、現段階での中間報告を本誌本号に掲載した(向田・東, 2005, 上原・東, 2005)。向田論文では、中国と日本は集団主義、儒教文化などを中心に互いに近く、米国は離れていると云う「常識」に反し、日中が共有し米国が離れる特徴のみでなく中米が近く日本が離れる特徴、日米に対し中国が離れる特徴、3国離散して特に「組」のできないものなどさまざまであることが示唆されている。上原論文では人物記述の内容的枠組みとして成功者因子、プロフィール・履歴書因子、近親者との関係因子が同定され、中国と日本での因子構造の違いが示唆された。同一因子枠のなかでの布置の比較と、因子構造の比較との両面から問題を詰める必要があると思われる。今後米国その他の資料も得ることができれば、スクリプトの文化的特質に直接的に接近するみちを提供すると考える。

くわしくは本誌に掲載の各論文にゆずるが、あらかじめ定められた尺度上(または尺度の空間内)にそれぞれの国の文化を位置付けて比較するよりも一歩進めたと言えると思うので更に分析検討を進めるのがたのしみである。世代間の差異もかなり顕著であり、特に世代と国との交互作用が相当に存在し、困難ではあるけれども興味深い考察の対象となるであろう。

## 個人と集団と国

このような考察を進めて来てどうしても避けて通れないのが、たとえばスクリプトのような「文化」は個人に属するのか、集団に属するのかということである。筆者はここまでやむを得ず、しかしある程度確信犯的に、「文化」という語を多様な意味で用いて来た。文化と云う語はさまざまな用いられ方をしており、広い定義を求めると個人の中の頭の中であろうと集団に共有されようと「すべての人工物」(Cole(1991))とでもいうほかはないだろう。しかし近年まで、文化人類学や比較文化心理学(cross-cultural psychology)と云う場合の文化は、かなり限定された意味をもつものだった。たとえば文化人類学者のKroeber & Kluckhohn (1963)は、「文化とは歴史的に形成されて、集団の、すべてまたは特別に定められた成員に共有される、顕在的または潜在的な生き方のデザインの体系である」とする。ここで、「歴史的に形成」ということと「集団に共有」ということに注目すると、文化はひとつの歴史をたどった集団の成員に共通する行動や生活のパターンとなり、民族や、地域的に孤立した集団がその担い手と見られることになる。こういう文化観に立った時、文化心理学は歴史的に比較的孤立した集団の民族誌的研究や民族心理学か、文化の差異に基づくと考えられる民族、地域の成員の心性の比較をする比較文化心理学となる。

このような文化観に立つ比較文化心理学は、文化の差異が行動の差異をもたらしているという考え方、つまり文化が独立変数で行動が従属変数である、言い換えれば文化が原因で行動や心性はその所産であるという図式に傾くことになった。人の習性や考え方、感じ方は周囲の文化を取り入れながら形成されるので、この図式はある程度の経験的妥当性を持つ。だが、一定の文化を共有する集団内での個人差はこのような一般化の邪魔になるので、注目の外に置かれる傾向があった。集団内での個人

差はいわば「誤差」になるのだった。

だがすでに指摘したように、文化は人工物であり人によってつくられて来た。人のつくり出す「もの」、これは考えや認識も含むが、そのような人の行動や精神活動の所産が文化を育てたり、変革したり、創造する。従って文化と心の関係は一方的に因果的であるよりも相互構成的であるということは経験的に自明な事実である(北山, 1997)。どちらかを独立変数つまり原因ときめてかかることはできない。人から文化への規定も視野に入れるならば、同一集団の成員でもそれぞれ異なった文化環境を持ち得る。伝統的な民族心理学や比較文化心理学はこの「人から文化へ」の構成作用をとりあげきれなかった。比較文化心理学と文化心理学と区別しようとする最近20年程の動き(例えばCole, 1991)は、人と文化の関係の相互性にあらためて注目しようとする動きでもあった。波多野ら(1997)は端的に、文化心理学は「文化と心の相互関連を扱う学際的科学である」と定義した。そしてその接近法として3種のアプローチをあげる。ひとつは、文化を集団に歴史的に共有されるものとし、それと集団成員の心性との対応を求めるもので、上述の比較文化心理学的接近はこれにふくまれる。もうひとつは文化を個人を取り巻き個人と「絶えず相互交渉する他者および人工物の全体」として捉え、人の心の形成に「社会・文化的状況の果たす役割」に焦点をあてる(p.15)。「文化」は、比較文化心理学においては固い持続的な体系として捉えられるのに対し、より流動的なものとして捉えられることになる。この「変種」としての第3の接近は、流動的な社会・文化的状況が人の認知や能力に規定的にはたらく面に注目する。

筆者はこれに第4の接近法を加えたい。これも第2の接近の変種と見なせるかもしれないが、個人が自分のまわりに「自分の文化」を紡ぎ出すこと、つまり、個人が文化に能動的にはたらきかけかつそのまとまりの核になることに注目するのである。

この考え方の徹底した形は、比較文化心理学で「文化」の担い手とされた自然的集団、たとえば「民族」、が安定した存在ではなく、一種のフィクションであるとす。小坂井(2002)は「民族同一性を支える根拠は、当該集団の内在的特性にではなく、差異を生み出す運動に求められなければならない」(p.12 - 13)とする。実際、そのような虚構の実体化が政治権力のため、あるいは特権の正当化のためにしばしば行なわれたことはわれわれの記憶に新しい。だが不安定で流動的であることをもってただちにその実在性を否定することは出来ない。戦争の中で形成期を過ぎた筆者にとって、独特のフィクションが支配し定義した「日本」は、まぎれもなく筆者の成育環境であり、筆者の形成に正負両方の意味で大きくかかわった。

だが確かに現代人の文化環境は、以前はそうあった(とわれわれが想像する)よりも遥かに目まぐるしく変動する。現代人は旅行により、移住により、交友により、また文物や情報通信を通じて、きわめて多様な文化に接触する。そして文化同士も相互作用しまた混合するので、20世紀前半の比較文化心理学や文化人類学がしばしば考えたような、境界のはっきりしたまとまった体系として成員の考え方、行動の仕方を規定する集団文化、地域文化を取り出すのは困難である。嘗ての世界の文化状況を諸文化のキルティングにたとえるならば、今は織りむらのある交ぜ織りだと云えよう。

文化が精神の形成の大きな要因だということはあらためていうまでもない。けれどもそれは、必ずしも人の精神の形成が、地域や民族や歴史やその他の所属集団に即して定義される〇〇文化によると



いうことではない。個人の精神の形成にかかわる文化素子の集合は、いわばdevelopmental niche (Super & Harkness, 1966) であって、個人間でさまざまな重なりを持ちながらも人ごとに異なる。こういう時代にあって、文化を、各個人に帰属させて考えることも必要になる。

筆者が「個人の文化」ということを漠然とながら考えるようになったのは、1980年から90年台にかけて盛んになったindigenous psychology (土着心理学)運動について考えたときである。第2次世界大戦後の植民地解放が進み、欧米外の心理学研究者が増えるにしたがい、それまでの心理学が方法においても理論においても欧米中心で、非欧米人に関してfairなものではないということが認識されるようになった。そしてそれぞれの文化圏での土着の心理学に価値を見い出そうという運動がおこった。これがindigenous psychologyである。それは温和な形ではいままで注目されてこなかった文化圏での知見が心理学を豊富化するというのがあったが、より急進的な傾向としては、文化圏ごとに独自の心理学が構築されるべきだということにもなって来た。

けれども筆者は、文化圏の境界があいまいで流動的かつ多義的になってきている現在、文化圏の単位は結局個人の世界まで細分化されなければならないのではないかと考えた(Azuma 2000)。これは筆者の創見というわけではなく、文化の個人化ということについてBarth (1993)が既に述べており、またRapport (1997), Gjerde (2004)なども集団文化を個人の上に置く文化観に否定的である。小嶋(2001)も一応文化を「多様なアイデアと技術のプール」として外在化させるが、そこに埋め込まれた形で、個人に内化されたアイデアと技術の集合としての個人内文化を対置している。この場合、一つの文化としてのまとまりは個人の側に帰属させることにならざるを得ないだろう。このようにニュアンスを異にしながらも個人文化は文化心理学の接近法のひとつの流れを形作りつつあると言えよう。2004年の北京における国際心理学会での筆者の基調講演もその考えを中心に論じた(Azuma 2006 予定)。

それは集団に伝統的に伝えられる集団文化を否定するのではない。しかし個人の行動や心性の説明を直接集団文化に求めるのではなく、まず個人及び個人の内に貯えられた文化と、developmental nicheとしての文化環境との相互交流、相互形成に着目し、その個人が集団を形成していて、その集団が文化の個人間、世代間の伝達、相互作用や波及の媒体となっている所に集団文化を考えようとするのである。いわゆるホロン・ヒエラルキーとして、個人の文化も集団の文化もそれぞれに一つの統一体であり得るのではないか。

人ごとに異なる文化を記述するには、理想的にいえば、それぞれの人の生育過程のさまざまな挿話をできるだけ詳しく追うことから始めるのが正攻法だろう。実際そのような努力をしている研究者もあり、貴重な資料を提供している。だが縦断的に追跡する場合、労力的に例数をしばりこまなければならず、一、二の例数では、良い洞察を刺激するけれどもそこから結論を求めるための概念化は、余程しっかりした理論に基づかない限り、容易ではない。そして現在のこの分野はまだ探索段階にあり、一例をもって勝負をつけられるような精密な理論はたっていない。さりとして多数例をとりあげると、統計的な集約ないし一般化が必要になり、個人的な細部が切り捨てられる。それで筆者は、少数例縦断研究の努力を尊敬し貴重に思うが、その他の道も考えなければならないと思う。

一つの方法として、外部又は集団の文化にも、個人内文化にも貯えられていて、かつ他の文化素子

を組織したり産出したりする、いわば大型の文化素子に関し、個人内、集団内、および個人と集団の相互作用の中でそれがどのように分布し、どのように機能するかを見ることが考えられる。筆者が出来事スクリプトに関心をもったのは、それがそのような大型文化素子の一例であって、個人の人間関係行動やその評価や判断にも、集団の行動や判断の形成にも、生成的にかかわると考えたからである。問題の大きさにくらべればきわめて部分的かつ周辺的であるかもしれない。また筆者の年齢からして、日暮れて道遠い感を拭い得ない。しかしとにかくどこかからはじめなければ、ということで、この15年程の間、発達研究誌をベースにつみかさね展開して来た一連の研究を通覧した。ほかにもCAMI 研究、語り聞かせ研究など深く関連する諸研究があるが、誌数の関係で別の機会にゆずる。

## 文 献

- 東洋(1994)「日本人のしつけと教育」東京大学出版会
- 東洋(1999)文化心理学の方法をめぐって：媒介概念としての文化的スクリプト。「発達研究」14, 113—120
- 東洋(2002)道徳判断の文化心理学 「法と心理」2, 1—9
- 東洋(2002)「社会的判断の国内下位文化による変動の研究：文化間変動因と文化内変動因の交差妥当性の試み。平成11年度・13年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))成果報告書
- 東洋(2003) 書評にこたえて「児童心理学の進歩2003年版」317—325
- Azuma, H.(2000) “Indigenous to what?” *International Society for the Study of Behavioral Development Newsletter*, 9-10
- Azuma,H.(2006 予定) “Conceptual issues of cultural psychology.” *Proceedings of 2004 International Congress of Psychology*. Washington, D.C.: Psychology Press
- 東洋・唐沢真弓(1989)「道徳的判断過程についての比較文化的研究：逐次明確化方略による試み1, 2」.「発達研究」5, 185—204
- 東洋・唐沢真弓(1991) 道徳的判断過程における認知的枠組みの比較文化的研究。「発達研究」7, 65—72
- Barth, F.(1993). *Balinese Lives*. Chicago: University of Chicago Press
- Bruner, J.(1990). *Acts of Meaning*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Cole, M. (1996) *Cultural Psychology: A once and future discipline*. Cambridge: Belknap Press of Harvard University Press
- Gjerde, P.(2004). Culture, power, and experience: Toward a person centered cultural psychology. *Human Development*, 47, 138-157
- Gilligan, C. 1982 *In a Different Voice : Psychological theory and women's development*. Cambridge: Harvard University Press
- 波多野諠余夫・高橋恵子(1997)「文化心理学入門」。東京大学出版会
- 河合隼夫(1982)「昔話と日本人の心」。岩波書店

北山忍(1997)文化心理学とは何か。柏木恵子,北山忍,東洋(編)「文化心理学:理論と実証」第2章。

東京大学出版会

小坂井敏晶(2002)「民族と云う虚構」東京大学出版会

小嶋秀夫(2001)「心の育ちと文化」有斐閣。

真島真里・唐沢真弓, Yeh, C., 東洋(1994)。道徳的挿話における前後文脈産出。「発達研究」10, 57—66

真島真里・唐沢真弓, Yeh, C., 東洋(1995)。道徳的挿話における前後文脈産出:内容分析の方法と結果の概要。「発達研究」11, 87—99

真島真里・Shapiro, L., 東洋(1998)作文課題による目標構造と将来展望に関する研究:「目標を持って努力したこと」の日米比較(中間報告)。「発達研究」13, 106—118

向田久美子・東洋(2005印刷中)10年後の将来像:日中比較の中間報告。「発達研究」19

森岡清美(1991)「決死の世代と遺書」新地書房

Rapport, N. *Transcendent Individual: Towards a Literary and Liberal Anthropology*. London: Routledge

Super, C.M., & Harkness, S. (1986). The developmental niche: A conceptualization at the interface of child and culture. *International Journal of Behavioral Development*, 9, 549-569

上原泉, 東洋(2005印刷中) 物語作成の際に重視する項目は何か:日中比較の中間報告。「発達研究」19

Super, C.M., & Harkness, S. (1986). The developmental niche: A conceptualization at the interface of child and culture. *International Journal of Behavioral Development*, 9, 549-569.

Lonner and Malpass: *Psychology and Culture*, 97-8による要約)

